

発掘された大名屋敷と味噌工場 ―仙台坂遺跡―

遺跡の概要

仙台坂遺跡は品川区東大井4丁目1、2番にあり、武蔵野台地の東南端にあたり、標高約16mの舌状^{ぜつじょう}台地上に位置します。1987年（昭和62）から88年にかけて、東京都都市計画道路・補助第26号線の仙台坂トンネルの工事に伴って、調査発掘されました。

「仙台坂」の名は、江戸時代、この付近に陸奥国仙台藩伊達家の下屋敷があったことに由来します。仙台坂遺跡は、その伊達家下屋敷の北東隅にあたり、江戸時代の大名屋敷にちなんだ遺構・遺物が、数多く出土しました。また、この江戸時代から屋敷内で始まった味噌（仙台味噌）造りに関する遺構・遺跡も、多数確認されました。

仙台坂遺跡からみる大名屋敷

仙台藩伊達家がこの地に下屋敷を構えたのは、1658年（万治元）のことです。仙台坂遺跡の発掘では、屋敷地と外を隔てる堀が発掘されました。この堀は幅約5m、深さ約2mで、内側には塀があったと考えられます。ただし、こ

の堀は完成後比較的早い時期に埋めたてられたと考えられています。さらに、伊達家の家紋のうちの縦三引両文と九曜文^{たてさんひきりょうもん くようもん}の瓦が多数発見され、大名下屋敷の建物の様子をうかがうことができます。

さらに、碗・皿・徳利・なべなどの日用品から高級品いたるまでのさまざまな種類の陶器や、泥人形・泥面子^{どろめんこ}などの玩具も出土しました。また、埋葬されたとみられる犬の骨が4匹分出土しました。ペットとして飼われ、死後丁重に葬られたと考えられます。そのうち一匹は大型犬であり、外国の犬かその子孫と推定されています。珍しい犬として、藩主など上級武士かその家族に飼われていたのかもしれません。

下屋敷に住む多くの人の生活を支える日用品、大名やその家族が使った高級陶器と玩具、ペットとして飼われた珍しい犬など、仙台坂遺跡から出土した遺物は、下屋敷内での生活を知る手懸かりを私たちに伝えてくれます。

1660年（万治3）、仙台藩第3代藩主伊達綱宗^{だて つなむね}は、不行跡により幕府から隠居を命じられます。彼は1711年（正徳元）に没するまで、50年以上



仙台坂遺跡の出土品

に渡りこの下屋敷で暮らしました。仙台坂遺跡からは、柿右衛門の皿などの高級陶器の破片や、高級食卓塩の容器である焼塩壺など、この時期のものと考えられる高級品が比較的多く発掘されており、綱宗の隠居生活を垣間みることができます。

仙台味噌屋敷 ー大名屋敷から工場へー

綱宗が没する（1711年）時期以降の出土品には、日常生活用具が多くなります。それを追うように、18世紀中頃からこの屋敷で味噌が醸造されたことが、今回の発掘で確認されました。つまり、18世紀中頃のものを最古に、江戸時代味噌醸造に使ったと推測される5カ所の石組みの竈跡が発掘されたのです。

この屋敷での味噌造りは、当初は江戸にいる伊達家家臣用の小規模なものでしたが、やがて商品として大規模に生産され、幕末の1855年（安政2）の切絵図には、この下屋敷は「仙台味噌屋敷」と表記されるまでになります。仙台藩は常陸国龍ヶ崎（いまの茨城県龍ヶ崎市）に飛び地を持っており、ここで生産される良質の大豆が、味噌の原料となったのです。

明治になり、味噌醸造施設は煉瓦造りとなります。ボイラー・煙突・煙道・窯など、煉瓦造りの遺構が発掘され、近代的な工場が営まれたことが分かってきました。維新後、伊達家の経営した味噌醸造会社は、1902年（明治35）八木家に経営権が引き継がれ、八木合名会社仙台味噌醸造所となります。この遺構もその前後に築かれたと考えられます。

原始古代の仙台坂

ー仙台坂貝塚と品川大井古墳群ー

仙台坂遺跡からは、近世・近代の遺構・遺物だけでなく、古墳の周溝が2カ所発見されました。この古墳は6世紀前半から中頃にかけて築かれたと考えられます。現存しないものの、仙台坂遺跡の周辺には数基の古墳が確認されており、古代、この一帯に古墳群（品川大井古墳群）が営まれたと考えられています。

また仙台坂遺跡の隣接地には、縄文時代後期と考えられる貝塚（仙台坂貝塚－現存せず－）があり、縄文時代からこの近辺で人びとが生活していたことが確認されています。



近代の味噌醸造施設